JAPAN HERITAGE
日本遺産

令和元年度　日本遺産認定記念

「里沼」シンポジウム

SATO-NUMA

報告書

令和２年（2020）２月

館林市「日本遺産」推進協議会

JAPAN HERITAGE
日本遺産

令和元年度　日本遺産認定記念

「里沼」シンポジウム

SATO-NUMA

報告書

令和２年（2020）２月

館林市「日本遺産」推進協議会

あいさつ

みなさん、こんにちは。日本遺産認定記念として「里沼」シンポジウムを開催するにあたり、ご挨拶を申しあげます。

今、館林市の多々良沼には、ハクチョウが 170 羽ほどやってきております。そして、毎日、多々良沼と城沼を往来しておりますが、これは全国的にもまれなことではないかと思います。それも、この地域に沼辺がたくさんあるということだといえます。

本日は、祝日のお休みの中、またご多用の中、この「里沼」のシンポジウムに足をお運びいただきましたこと、厚く御礼を申しあげたいと思います。

ちょうど昨年の 1 月 25 日、日本遺産に私たちは申請を試みました。その結果、5 月 20 日、めでたく、お陰様で認定をいただくことが叶いました。1 年間の準備、また 1 回目のチャレンジということで認定をいただくことができたことは、大変ありがたいことだと感謝をいたしております。

今日は、その審査委員を務めていただきました丁野朗先生にお越しいただきました。基調講演といたしまして、「日本遺産を活かす視点と手法」についてご講演いただくことになっております。

また、今日お集まりいただいた皆様方のなかには、「里沼」を構成いただいております関係団体の皆様もたくさんいらっしゃっております。今日のこのシンポジウムを通じまして、皆様方の郷土愛がさらに深まりますとともに、今後、地域活性化、「里沼」を活かした地域活性化への、飛躍へのステップの日、あるいはキックオフの日となりますことを心から願いまして、開会の挨拶とさせていただきたいと思います。

最後までどうぞよろしくお願いいたします。

令和 2 年 2 月

館林市「日本遺産」推進協議会会長
館林市長　須藤　和臣

例　言

1　本書は、令和 2 年（2020）2 月 11 日（火・祝）午後 1 時 30 分から、館林市三の丸芸術ホールにおいて開催した『日本遺産認定記念「里沼（SATO-NUMA）」シンポジウム』の実施結果報告書である。

2　第 1 部「基調講演」の講師は、丁野朗氏（観光未来プランナー･日本遺産審査委員）に依頼した。また、第 2 部「演舞」では、日本遺産「里沼」構成文化財「上三林のささら」を行い、上三林ささら保存会の皆様に出演いただいた。さらには､第 3 部「パネルディスカッション」として､コーディネーターを橋本淳司氏（水ジャーナリスト）、パネラーは丁野朗氏、正田隆氏（館林商工会議所会頭）、恩田昭一氏（館林市認定農業者協議会会長）、須藤和臣（館林市「日本遺産」推進協議会会長／館林市長）の各者が務めた。

3　本書の編集は、館林市「日本遺産」推進協議会事務局歴史文化部会（館林市教育委員会文化振興課日本遺産プロジェクト）の岡屋紀子・吉村昭和・岩瀬宇が担当し、シンポジウムの文字起こし及び校正は館林市教育委員会文化振興課市史編さんセンターの井坂優斗・島村敏江が担当した。

目　次

あいさつ
例　　言
目　　次
実施結果…… 4
内容
第 1 部　基調講演　「日本遺産」を活かす視点と手法 ～館林の里沼物語をどう活かすか～ …… 5
第 2 部　演舞　日本遺産「里沼」構成文化財「上三林のささら」 …… 12
第 3 部　パネルディスカッション　日本遺産「里沼」と館林の未来 ～ヌマベーションを合言葉に～ …… 13
当日の様子（記録写真）…… 19
アンケート結果…… 20
当日配付プログラム（抄録）…… 24

令和元年度　日本遺産認定記念「里沼」シンポジウム　実施結果

1　事　　業　　名：文化庁文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）
　　館林市「日本遺産」シンポジウム開催事業

2　シンポジウム名：令和元年度　日本遺産認定記念「里沼」シンポジウム

3　開　催　期　日：令和２年（2020）２月11日（火・祝）
　　開始　午後１時30分　（開場　午後１時）
　　終了　午後４時15分

4　会　　場：館林市三の丸芸術ホール　（群馬県館林市城町１番２号）

5　参　加　者　数：300名

6　主　　催：館林市「日本遺産」推進協議会

7　内　　容：

❖第１部　基調講演
「日本遺産」を活かす視点と手法～館林の里沼物語をどう活かすか～
講師　丁野　朗　先生（観光未来プランナー・日本遺産審査委員）

❖第２部　演舞
日本遺産「里沼」構成文化財「上三林のささら」
上三林ささら保存会

❖第３部　パネルディスカッション
日本遺産「里沼」と館林の未来～ヌマベーションを合言葉に～
コーディネーター　橋本　淳司　氏（水ジャーナリスト）
パネラー　丁野　朗　氏（観光未来プランナー）
同　正田　隆　氏（館林商工会議所会頭）
同　恩田　昭一　氏（館林市認定農業者協議会会長）
同　須藤　和臣　氏（館林市「日本遺産」推進協議会会長／館林市長）

❖その他
（1）「里沼」マルシェ（日本遺産「里沼」関連商品の特設販売ブース）　協賛各店
（2）日本遺産「里沼」展示　館林市日本遺産プロジェクト
（3）日本遺産「かかあ天下―ぐんまの絹物語―」展示　群馬県企画部世界遺産課

❖第１部　基調講演
「日本遺産」を活かす視点と手法～館林の里沼物語をどう活かすか～
講師　丁野　朗 先生（観光未来プランナー・日本遺産審査委員）

皆様こんにちは、丁野と申します。今日は日本遺産認定の記念講演会ということで、まことにおめでとうございます。とはいえ、日本遺産という言葉、まだまだご存じの方は少ないと思います。世界遺産という言葉は、この辺では日光などが良く知られていますが、世界遺産は今から50年ほど前の1972年にできたユネスコの制度です。日本では1992年に条約を締結し、それから30年たっているわけですね。世界遺産というのは、皆さん大体こんなものかなというのはお分かりかと思います。日本遺産は、2015年に文化庁が創設をした制度で、まだあまり馴染みがないですね。おそらく今日この会場の中で、日本遺産という言葉を初めて聞いたという方もいらっしゃるのではないかと思います。

今日は、去年５月に日本遺産の認定を受けました、日本遺産「里沼」についてのテーマを中心として、今回の講演のお話をいただきました。市長もさきほどおっしゃっていましたが、まさに今日が、そのキックオフの会になるのかなと思います。

現在、日本遺産は全国に83件あり、今年までに100件の日本遺産を決定しようとしています。一言でいえば、日本を象徴する100の物語というふうに考えていいと思います。たとえば皆さんが、海外などにお友達がいれば尚更ですが、日本、そして群馬県、そして館林を象徴するものって一体何なんでしょう、と言ったときに、パッと答えが出るかどうかです。館林のなかで日本を象徴するものを、例えば10個挙げてくださいと言ったとします。これは、皆さんへの今日最初の宿題とさせていただきます。皆さん、何が挙げられますか。海外からのお友達に、これが日本だよ、ということを象徴できるものを10個です。今日は是非、会場でそれを考えながらお帰りいただければと思います。

今日は、この日本遺産を活かすための目の付け所、「視点」とその「手法」について話をさせていただき、このあとのパネルディスカッションにつなげたいと思います。

１．物語による地域ブランディング

今日は、４つほどお話をしたいと思っています。

まず、日本遺産は基本的に物語ということです。物語と、その物語を活かしながら地域活性化のための具体的な事業を行うというものです。要するに地域をブランディングするというのが一番大きな目標です。いろいろな日本遺産がありますので、他の地域ではストーリーをどうやって活かしているのかをご紹介します。そして、この館林でもどんな可能性があるのかについて考えてみたいと思います。

最初に分かりやすいお話をします。観光って何ですかと聞かれたとき、どんなふうに答えるかです。いろいろな考え方があると思います。例えば、うちにはいい温泉があるよとか、いい食べ物があるよとか、いい景観があるよとか、大体そういうものが観光地になっています。でも、そういうところは、日本中あるいは世界中にたくさんあるんですね。私たちはそういう地域を選ぶとき、何で選んでいるのかです。どこそこの地名が出たときに、あ、あそこはこういうところなんだよと言えるかどうかです。例えば、山口県の萩というところがあります。長州の城下町だった萩です。そこは町並みがしっかり残っていて、私はその町並みのなかに入ると思うと、背筋がピーンとします。武士道というものでしょうか。それがいまだに町中に残っている。そういう一種の空気感、その土地が持っているものなんですね。ですから、観光というのは物語が大切で、その物語を消費する、つまり「物語消費」です。物を消費するということ、実は本当に消費しているのは物語なんですね。

〈観光は「物語消費」〉

分かりやすい例を紹介します。「北の国から」というドラマがあります。舞台が北海道の富良野。富良野は自然が非常にきれいなところで、私もこのドラマが始まる頃、訪ねておりました。ものすごくきれいな自然があり、このドラマが何度も何度も放映されました。1981年に始まり、最後は「2002遺言」、これが一応シリーズの終了となったのですが、これが非常に話題になって何度も何度もテレビ放映されました。そうすると、例えば、富良野に行かれた方が、ちょっとしたこんもりした森、そこから流れる小川、ときどきキツネがピョンピョンと飛び出してくる。それから石のお家がある。何でもない風景なんですね。しかし、この何でもない風景がドラマによって、登場人物がまさにドラマを繰り広げ、物語をそこで作っているんですね。ですから、来られた方々というのはその物語を頭の中に描いて現地に行くんです。一個一個は別に名勝地でも何でもないのですが、ドラマによって、そういうものなんだ、だから行ってみようということになるわけです。これが、物語による効果ということなのです。もともと観光客が５万人とか10万人くらいしか来ない小さな町だったのですが、富良野には今250万人が訪れているそうで、日本を代表するような観光地になったんですね。ラベンダー畑などは昔からあったのですが、優れた物語そのものが地域のブランドになっ

ているわけです。

そう考えると、この「里沼」の物語が館林のブランドになるのです。そのためには、いろいろな方々に「里沼」の話をしてもらわないといけない、ということです。

〈再生と子宝の城崎温泉の物語〉

もう一つ例をあげます。私は温泉と蟹が大好きで、特に関西の人達が温泉と言えば、城崎温泉です。こうした冬の季節になると、まず頭の中にパッと蟹が浮かびます。何はともあれ城崎へ行こうと。もともとこの地には、こういうゴツゴツした玄武岩があり、円山川が流れています。川が氾濫して、その周辺にはアシとかヨシとかが生え、そうした土地の上を悠然とコウノトリが飛んでいます。羽を広げるとトキなどよりも遥かに大きく、小型のグライダーが悠然と飛んでいるような、そういう景観です。

そういう中でヤナギゴオリが作られてきました。昔の方はこういう旅行かばんを持っていましたが、これがのちに今や世界ブランドとなった「豊岡かばん」になってきます。

また、この石を使って町をつくっているんですね。これが城崎温泉です。それが、地域の持っている特徴で、地形に特化したまちづくりというものです。ここでは、これがもとになった物語ができています。城崎といえばコウノトリがシンボルで、城崎は出生率が非常に高く、1.9あります。そして城崎温泉があり、神社がある。こういうものをベースにして物語をつくったのです。とてもいい物語で、起・承・転・結になっています。誰に受けたかというと、結婚された後にまだ子宝に恵まれていない、そういう若いカップルに受けた物語です。何かこう、復活の予感がするというところから物語が始まります。これはペルソナ（顧客の層）といいますが、お客様によって物語の作り方が違うということなのです。

「里沼」のタイトルも、どういう側面に誰が共感してくれたかということです。みんな共感ポイントが違う。スポーツをしようと思ってこの沼に来る人、美味しいものを食べようと思ってこの沼に来る人、いろいろなタイプの方々が来られるわけです。ここに、若いカップルだけではなくて、もと若い女性、そういう女性たちがたくさん来るわけですね。そういう方々にとってみると、健康とか美容とかが非常に大きなテーマになっています。そうすると物語をちょっと変えなくてはいけない。「里沼」物語を語るときに、相手によって少しずつ物語の共感ポイントを変えていくということが必要になります。

〈日本遺産は地域を象徴する「ブランド」〉

それから、こんな日本遺産があります。これは黒曜石で、縄文人が日々獲物を求めて造っていた道具です。ここは長野と山梨の県境にあり、縄文人たちが黒曜石を掘っていた鉱山跡で、星糞峠というところです。これは、2018年に認定された「星降る中部高地の縄文世界」という日本遺産です。ここでは黒曜石を軸にしながら、どういう暮らし、どういう生活、どういうものを作り上げてきたのか、縄文のものづくりの最先端というテーマで日本遺産となったわけです。そして、これは縄文ヴィーナス、これが縄文人の復元住居ということで、縄文の物語を可能にしました。

それからこんなものもあります。チブザン古墳といいます。熊本県の山鹿から菊池川という一本の川が流れ、菊池川沿いにはものすごい数の古墳があります。150を超える古墳があるんですね。なぜここにこんなたくさんの古墳があるのかというと、卑弥呼の発祥の地という一説もあります。こういう古墳をたくさん造ることができるということは、財の蓄積が無ければ造れません。巨大な財の蓄積、その財が何なのかということです。そして、お城があります。お城というと、だいたいの方は近世以降のお城をイメージしますが、これは古代の山城です。大宰府にここから兵と人と物資を供給する拠点になっていた古代山城です。2017年に日本遺産になりました。山鹿・玉名・菊池と和水町の３市１町で作った「米作り、二千年にわたる大地の記憶」という日本遺産です。米作りが弥生時代以降、２千年間延々と続いてきました。元々、山鹿周辺は条里制が非常に整備されたところがあり、米作りを拡大するために、山の方に水路を掘って、井手といいますが、その水路を作ることによって米の生産が拡大している。そしてもっと拡大するために、海側に向かって巨大な干拓地を作り、米の生産量を上げていく。そういうことをやったんですね。２千年も前から米を作っている。実はその中に鉄がある。当然鉄製農具が生産性を上げて米作りを支えていく。そしてこの財の蓄積が巨大な古墳群を生み出したのです。そして、その力をもとに大宰府に米と兵を供給する拠点を作った。そして、米作りのために延々とインフラ整備を進めてきました。一番最後は明治政府の大干拓事業です。玉名干拓といい、高さ４～５メートルくらいの干拓の堤防を延々５キロ作りました。そしてこういう財の蓄積から暮らしの文化が生まれます。船着き場や高瀬舟の港、街道の賑わい、そして米をめぐって様々な食文化や酒造りが生まれる。祭りでは、雨乞いとか風を鎮める祭りとかがあり、こういうものを一本のストーリーにして、そうだ、うちの地域はこうやって２千年延々とやってきたんだ、ということなんです。「里沼」というテーマに非常に近いものがあるなと、思っています。

モノは違いますが、皆さんが館林がどういう所なのかと考えるとき、一言でも二言でもいいのですが、自信を持って言えるものがあるかですね。そういうものが必要なんです。

２．地域ストーリーとしての日本遺産

〈ストーリーとしての「日本遺産」〉

さて、先ほどからストーリーとしての日本遺産ということをお話しいたしました。日本遺産というのは、一個一個が重要文化財とか国宝だとか、どっちがすごいとかそういう世界ではないのです。もちろん一個一個の文化財の背後には、その文化財の物語があります。しかし、時代も違うし、対象物も違うし、バラバラなんです。どうしてこんな文化財がこの地域にはたくさんあるのかと考えたときに、その地域の基本的な一種の地形だとか地質だとか、あるいは地域が持っている大きな特質、そして生態、そういうところから解き明かさないと、なぜこんな文化財が生まれるかはわからない。だから物語を見てみましょうということなんですね。要するに日本を象徴する「100の物語」なのです。

例えば「出雲國たたら風土記」という日本遺産があります。これは2016年に認定されました。奥出雲の２市１町で、現在も「たたら」が稼働してます。その「たたら」がなくなると、日本からある文化が消えます。日本刀です。日本刀というのは我々日本人のシンボルで、つまり日本を象徴する物語の一つになっているのです。

私は今、広島県呉市の仕事をしています。ここは昔の海軍の鎮守府で、戦艦大和を生み出した港です。この大和の一番心臓部に、この「たたら」で造った玉鋼をドンと入れたんですね。量は大して入れていませんが、やっぱり日本人ですね。日本を守るための船の一番大事なところに日本刀の材料である玉鋼を入れました。これは、日本人のメンタリティーですね。

〈地域文化資源の抜本的活用が大きな鍵〉

次に、日本遺産はどうして生まれたかについて申し上げます。平成28年にいよいよ日本も観光立国、つまり技術立国や環境立国などいろいろな言葉がありますが、その一つとして観光で国を立てていこうということで、国をあげてその方針を出しました。そのときに３つの視点と10の重点施策というのを出しました。

３つの視点の一つが文化資源等の活用です。今まで本当に私たちは国宝や重要文化財を十分活用してきたか。そういう反省があったんです。確かに優れた文化財はあるけれど、見たことがないよね。立派な国立公園があってもテントは立てられない。こんな状況なんです。ですから、文化財をもっともっと活かしていこう。活かさないで保全だけではいけないというふうになってきました。ですから、文化財を観光的目線で、保全優先から活用へとなったわけです。そして、2020年、つまり今年までに文化財を活用した観光拠点を200か所制定するということです。200のうち、日本遺産は100です。残りの100は歴史文化基本構想とか、それに基づく地域計画などを100か所作り、両方合わせて200となります。

いずれにしても、日本遺産というのは、ここから生まれています。大きなビジョンを示して、これを毎年毎年アクションプログラムという形で、これをさらに細かく具体的な事業レベルにして、そこに重点的にお金をつける。こういう取り組みで今の日本の観光を動かしてます。今回、コロナウィルスの件でかなりしんどい思いをしていますが、2020年に向けて、当初から見るとびっくりするくらいの成果を上げています。

さて、日本遺産って何か難しいなっていうふうに思われる方もいると思いますが、こんなものも紹介します。「日本一危ない国宝鑑賞」。これ、最初出てきたとき私でもギョッとしました。これは鳥取県の三朝温泉と三徳山です。修験者の話で、ストーリーをきちんと描いています。大体どこの地域でもオオカミが出たり、サルが出たりいろいろ出てきますが、ここは白いオオカミが出てきます。助けてもらった代わりに温泉を教える。その温泉に「六感」を癒しに修験者がやって来て、彼らは翌日三徳山で「六根」を清める。これが基本ストーリーです。大事なことは、物語だけなら「ふーん、面白かったね」で終わってしまいますが、それに伴って、いろいろな経済活動を埋め込んでいかなければなりません。この三徳山の例でいうと、ここにはラドン温泉があります。あまり聞いたことがないかもしれませんが、「ラジムリエ」というのがあり、「ラジムリエ」を養成して、彼らがちゃんと個別指導する。そして、医学的なエビデンスが欲しいので、地元の温泉病院とタイアップします。いわゆる湯治が持っている「現代医学」の裏付けですね。そして、健康は何といっても地のものを食べるのが一番いい。地のもの・旬のものを食べるのが一番いい。そういうものをたくさん出してくるんですね。そして、修験者が履いていたわらじを使って山に登っていきます。これは全部有料なんです。観光というのは面白いもので、人に買えと言われると嫌だけど、自分から財布の紐を緩めたくなるというのはありますよね。それは、そういう作法だとか、そういう物語に感銘してつい買ってしまう。これが大事なのです。だから物語なのです。

これがまさに、今回の館林の「里沼」に具体的に事業に落としていくことにつながります。そこにきちんとした経済を生んでいかなければいけないということなのです。

〈日本遺産は地域の物語を活かす地域活性化計画〉

日本遺産のストーリーというのは、ストーリー自体が非常に興味深い、斬新な、訴求力がある、希少性がある、この地域ならではというものです。こういう物語を伝えなくてはいけないということで、これが先ほど話した地域ブランドになります。しかし、重要なのはこれだけではありません。

あと二つあります。一つは、物語というものを活かしながら地域作りについての将来像を考えるということです。この地をこうしようよ、そしてそれを実現するための具体的な方策を講じましょうということです。地域の皆さんが共有していくということが、とても大事ですね。「里沼」の100年後、

この地域がどうありたいか、これが非常に大事ですね。

しかし、単に絵を描いただけでは動きません。ですから、誰が、どんな方法で、つまり、日本遺産を使った地域活性化の推進が可能となる体制づくりです。誰がどんなふうにして進めるのか、これが推進協議会の原点です。そして、さらに具体的事業に落としていかなければなりません。それを担う主体が誰なのかということを、きちんと整備して進めなければならないということです。

場合によっては、「再認定」ということも考えられます。先ほどの城崎温泉の話の中で「ジオパーク」について話しました。地域の皆さんがこれでいこうよという動きが出てこないとなりません。単に認定されて良かったねという話ではなくて、これを活かさないといけないということになります。

日本遺産の現状をお話ししますと、去年の５月20日に83件となり、今年もまた５月くらいになると思いますが、合計で100件を日本遺産に認定して、とりあえずこれで日本遺産は一旦終了します。今年で全部出揃うということになります。

各地域の日本遺産を時代別にしたものがあります。ここの「里沼」はどの時代に当てはまるのか、実は非常に難しいです。多々良沼などは古い時代になりますが、この地域で一番活発な活動をやっていた時期というのは、江戸時代に遡るだろうということで、一応この分類上は江戸時代に入れられています。

日本遺産全体をみると、いろいろなものがあります。資料をご覧いただければ、「え、こんなものがあるの」というような発見をしていただけると思います。なぜなら、いろいろな地域が自分の地域でブランドを作りたいと思って一生懸命考えてきたのがこの83地域です。83の物語です。ですから、館林と違うものもありますが、他の地域の皆さんがどう頑張って日本遺産になったか、非常に参考になります。

〈「里沼物語」の可能性と期待〉

次に、この「里沼」の話をしたいと思います。「里沼」という題は、非常に傑作だなと思います。「里地里山」「里海」っていうのはありますね。日本にはそういうところがたくさんあります。しかし、沼が暮らしに密着しているところは意外と少ないんです。沼自体が埋め立てられたり、都市化して劣化したりしています。かつては日本中にあり、沼と共に生き、沼と共にいろいろな産業を生み出し、沼がいろいろな意味で政治的な面も含めて生活の基盤になっていました。これがまさに「里沼」なんですね。ですから、この「里沼」はどうやって守られてきたのか、そして、これをどうやって将来につなげていくのかということを、我々は考えなければいけない。これが、今日のこの講演の一番の中身なんです。

この物語を見ると、沼が本当に多様な顔を持っていることがわかります。それを上手く「祈り」「実り」「守り」としている。響きがいいですね。この「里沼」という概念と、こういう非常にリズミカルなストーリーに審査委員が惹かれ、それが日本遺産認定の原動力になりました。また、審査会のなかで認定の前にヒアリングもあり、市長がとっても素晴らしいプレゼンテーションをされました。実はこれもとても大きな決め手になったのです。この「里沼」を地形的に見ると、利根川と渡良瀬川に挟まれた地形、いわゆる「ジオパーク」です。これがちゃんとあった上に、この地域に沼がある。これはとても大事な発端ですね。

例えば茂林寺沼、「祈りの沼」です。この沼の湿原のところに、600年ずーっと続く祈りの場があり、静かな祈りの場としての景観を残しているということです。祈りの場が沼に果たした役割というのはとても大きいと思います。

そして「実りの沼」多々良沼ですね。ここは館林のありとあらゆる産業の、いわばインキュベーターです。それを生み出す沼であったわけです。もともとは「たたら」があって鉄を作るということが生産のベースになり、多くの産業を生み出していったのです。そして、麦を原料とした様々な産業、醸造業などが生まれてきた。まさに「麦都」といわれるような、大きな産業を生み出してきたんですね。

そして、「守りの沼」。これが城沼の周辺です。

地域全体を見て、三つの大きな沼に代表させて、地域の特色を見事に描いていて、それがきちんと物語になっていると思います。

先ほど話した「里地里山」という考え方は、日本人ならいろいろなところで係わっていると思います。「里海」という言葉もあります。私は、先々週、三重県の志摩に行っておりました。国立公園でリアスがものすごい景観です。このリアスの中に、まさに海の暮らし、海の文化、海の実りがあります。ですから、まさに「里海」と言えます。ここはサミットも開かれ、世界中からいろいろな方がいらっしゃっています。

ですから、「里沼」というのも、基本はそういう考え方を踏襲してきたものであり、これからは、その中身を豊かにしていくことが必要です。これは地元でもう少し研究していかなくてはならないと思います。「里沼」というのは本当に希少価値なんですね。ここに沼がなぜ残ったのか。実は関東というのは、こういう「里沼」というような沼はたくさんありました。しかし、植物が繁茂して巨大化・湿原化し、やがて乾燥して草原化します。これがいわゆる生態植物転移ですね。そのままにしておくと、自然と無くなってしまいます。それから特に江戸時代は新田開発・治水対策などで、耕地が拡大することによって消滅した例もたくさんあります。そして、近代以降は工場用地・宅地化が進んで消滅しました。この頃は日本中から沼がどんどん無くなっていったんですね。

では、どうして館林の沼は残ったのか。これが非常に大事なのです。一つは先ほど河川の付け替えという話がありました。この治水対策で新しい耕地を確保することができたんですね。だから旧流路があったという位置に新田が誕生したため、沼を埋める必要がなかった。そして、この沼が人々の暮らしの中に関わり、つまり人が沼を必要としていた。これが信仰の場であり、生産の場であり、そして、要害・伝説の場であったのです。これはたまたまそうなったのではなく、歴史的な背景の中で、館林の沼がきちんと残り、活かされてきたのです。ここのところをしっかりと皆さんにご理解いただいて、この次に、さらに100年、あるいは300年後にも活かしていこうといったときに、何をしなければいけないのか。これが今日からのとっても大きな宿題になると思います。

３．日本遺産物語にみる地域活性事例

〈地域の体系化「なんだ、コレは！」〉

さて、日本遺産にみる地域活性化事例についてお話しします。先ほど、地形とか地質、その上に生態系があり今の社会があるという話をしました。そういう地域の成り立ちみたいな話をベースにした日本遺産があります。

それが「なんだ、コレは！」という28年度の日本遺産です。これはタイトルなんです。「なんだ、コレは！」。これは、火焔型土器という国宝ナンバーワンの土器なんです。これを最初に見たおじさんがいます。岡本太郎なんですね。岡本太郎が第一声に発した言葉が「なんじゃ、これ」と言ったそうです。最初は難しいタイトルがたくさん出ていました。しかし、タイトルが難しければ難しいほど、学術的になればなるほど、何か感動がなくなるんです。「なんだこれは」は感動的か知りませんが、「なんだ、これは」というと「何それ」という気になりますよね。だからタイトルをつける時、地元の方には、「なんだ、コレは！」でいきましょうと、私もお話ししました。

物語を簡単にお話ししますと、信濃川があります。40万年前の隆起で河岸段丘ができました。ここに縄文中期から人が住み始めて、火焔型土器を生み出すような環境ができました。やはり、河岸段丘という地形ですね。そして、縄文海進があり、今や世界一雪がたくさん降るエリアになった。その段丘の上に里地・里山が形成されました。現在、「大地の芸術祭」というものが開かれています。第７回目で、20年以上前から開かれています。大事なことは、「からむし」、つまりこの地域は越後縮（ちぢみ）の巨大な生産地だったのです。その原料がこの「ちょま（苧麻）」、「からむし」だったのです。このジオ（GEO）、バイオ（BIO）の上にソシオ（SOCIO）ということで体系化され、雪国ならではの暮らし、文化と食、産業が生まれます。雪と暮らすために、雁木とか、ジロバタ、チンコロとか、独特の暮らし文化があります。そして雪を食す。雪中貯蔵ですね。雪に祈るということで、ホンヤラドウ、バイトウなど漢字にできない言葉があります。漢字にできない言葉というのは、大体600年以上前に生まれました。無理矢理、漢字を当てても意味がない。そして、雪国なので雪晒（さらし）などができ、越後縮が生まれます。現在は、明石縮というシルクです。そして雪と遊ぶ。２月14日・15日に雪まつりがあります。この地域は非常に雪に閉ざされた地域だったので、天皇陛下が「何か楽しいことやりましょう」と言って始まったのがこの雪まつりだそうです。これが日本の雪まつりの発祥の地になったのです。

実は、館林の「里沼」もこういう観点でもう一回組み立て直すことも十分可能だなと思います。そうすると火山の話とか地形の話とかいろんなものがベースになって、なぜここにこんな優れた麦がある、なぜこんなすごい良い水がわいてくるのか、こういうことが全部説明できます。それがブランドの源泉になっていくということにつながります。

話をもとに戻します。面白いのが、雪国が織物産地となったことです。これは、へぎ蕎麦です。そして、これが織物で、「かせ」でクルクルっと巻くものです。同じ形をしています。そしてこれが火焔型土器です。上が火焔形状になっていますが、下の方は大河信濃川の波のようにクルクルっと巻いているんです。私の勝手な想像ですが、アートの遺伝子、５千年に渡るアートの遺伝子があったのではないかと想像します。ここまでいろんなデザインが共通するのは非常に面白いなぁと思っています。ここは「大地の芸術祭」の郷であり、「雪まつり」の郷であり、全部関わってるのではないかと思います。

バイトウというのは、要はどんど焼きなんです。中に集落の人が50人から60人くらいが入って、どんちゃん騒ぎをやって、「宴もたけなわでございますが」と言って中で火を点けます。この燃え方によって吉凶占いをする。典型的な吉凶占いですね。こういう奇祭があります。

さらに、こうした物語をもとにいろいろなプログラムがあります。例えば、火焔型土器を作った縄文集落ですから、「縄文女子旅」というものをやりました。あまりお金がないので、「縄文人」というフリーペーパーで募集したんですね。３日間で35～36人集まりました。ここは新潟県ですが、どこから来たかというと、青森です、佐賀です、愛知ですと。テーマ性の強いものは距離を選ばないんですね。そして、「5000年」という文字を使ったパッケージを作りました。5000年というのは火焔型土器が生まれてから5000年ですね。ですから、全てのものに「5000年」を使ってパッケージを作っています。これも是非やっていただきたいですね。一個一個のパッケージは非常に優れたものですが、その良さを残しながら、「里沼」を使った統一のサインを作っていただくということです。例えば、縄文の場合は、「5000年の○○」。これは何かというと、縄文人が食べていたものって何があるかと考えたんですね。例えば「サルナシ」、これはキウイに似たものです。これは、縄文人は絶対食べていただろうということで、サルナシで作ったアイスクリームを作りました。こういうものが非常に売れるんです。こういう共通してものを作るということが大事です。これは是非、是非やっていただきたい。物語を具体的に体験できるのは現地だけではなくて、こういうモノも必要です。お土産を必ず持って帰りますから、そういうものの中に優れたメッセージ、テーマメッセージがあると非常にいいですね。

４．日本遺産の可能性をどう拡げるか

〈日本遺産活用のための事業課題とステップ〉

さて、日本遺産の可能性について話します。もともと日

本遺産というのは、内閣府などが最初のベースを作り、今、文化庁が認定をやっています。しかし、活用っていう面では文化庁も単独ではできません。したがって、観光庁に活用を依頼しています。特に出国税財源を使ったさまざまな仕組みがあります。しかし、ちょっと見直してほしいのは、日本遺産というのは地域のブランドだということです。観光に限ってるのではなく、物産開発とか、新しい産業を生み出していくということです。そういう多面的な地域ブランドの活用の仕方を是非考えてほしいと思います。

いわゆる既存の観光地、しかもブランド化されている観光地というのは、最低でも30年かかります。皆さんもこの辺でよく知っている、草津にしても伊香保にしても、あるいは日光にしても、３年どころではないですよね。それこそ100年近い年数をかけて今の地位を確保したわけです。ですから、館林がそういう観光地になろうと思ったら、最低でも30年かかります。私はもっと総合的なものを目指した方がいいのではないかと思います。

今の観光客は、観光地域に行くというのは目的の中のほんの一部です。むしろ、その周辺にある、そこで住んでいる人たちが普段どんな暮らしをしていて、ちょっと自分たちとは少し違うけど、良いところだよねというふうに思ってもらえる、そこが一番今の観光の鍵となっています。町なかです。そして、海外からいらっしゃっている方などは、他には絶対にない日本の、まさに「里沼」のような景観ですね。これにきっと感動するでしょう。ですから、いわゆる観光地とは違うと思います。単に観光だけではない、ということですね。

この日本遺産制度のなかには、審査委員会とは別にフォローアップ委員会というのがあります。この制度が、ある意味ちゃんと上手く使われるために、そしてどう支援していけばいいのかということのために、フォローアップ委員会というのを開いています。たまたまその委員長を拝命しておりますが。その中で事業課題のステップみたいなものがあります。まずは、一言で言うと、「物語が伝わる」、物語の見える化といいます。「里沼」という物語が、行ってみるときちんと伝わる。「里沼」は割と見やすいので、いいのですが、そうではないところもあります。例えば、鬼をテーマにしたものとか、麒麟をテーマにしたものとかがあります。常時ないので、現地に行っても見られません。そういう場合は、日本遺産センターとか、あるいは徳島の阿波踊りのように、常時阿波踊りが見られる場所みたいなものを作らないと不満ですよね。せっかく物語を頭の中に描いて行っても、「いないじゃん」みたいな話になるわけです。ですから、環境整備・見える化というのは、現実に「見える」と同時にその地域のストーリーとか歴史がちゃんと見えるような、例えば、ミュージアムがあって、そこに学芸員がちゃんといる。サイトに行くとサイト、地域に行くと地域のガイドの方がいらっしゃって、そういうのが上手くつながっているのが大事です。いずれにしても、物語が伝わる環境整備が最初です。そして、それを基に長期の戦略が必要になります。この地域がどういう内容なのか。そして、こういう方向に沿って誰がやるのか、組織ですね。そしてその組織を動かす人がいます。これがまさに皆さんです。大きな当面の施策と大きな戦略があって，その上で初めて観光を含めた事業化というのが進んでいくのです。この事業化にも直接的な事業とインフラみたいのがいろいろあります。そして、大事なことは、地元の人たち、特に地域をずっと見てきている高校生とか中学生などが大事です。

この間、12月末に日本遺産「銀の馬車道」という兵庫県の生野、銀山の銀を運んだという、日本の最初の高速道路があります。そこで６つの高等学校の生徒と、地元だけでは難しいので、同じフランス人技師の指導を受けた愛媛県新居浜市の新居浜南高校の子供たちにも来てもらいました。夏場にいろいろなワークショップをやり、その発表会を去年の12月末にやりました。子供たちが一生懸命調べ、いろいろな方に話を聞いて本を作ったり、映像を作ったりしました。そして、この高校生たちが地元の小・中学生に講座を開いているんです。それから、転入で入ってきた人たちに向けても講座を開く。そして、地元の皆さんと一生懸命考えて出したものが子供食堂なんです。子供食堂を開くとそこにいろいろな子が入って来て、親が入って来て、地域の人たちも来る。こういうことをやると、自分たちの活動がとても良くわかってきます。是非、館林でも地元の高校生や中学生に活動に参加していただけるといいと思います。今日のような集まりの中にも高校生がどんどん出てきて、ここで発表できるくらいになるといいですね。

また、地域からの情報をいろいろな形で出していくというのも必要です。ポスターとかパンフレットもいいのですが、海外には伝わりません。SNSを使って、個人個人がつながっていくのも大切ではないかと思います。

〈地域ブランディングの事例〉

次に、小松の石の物語を紹介します。日本遺産です。ここはいわゆる九谷焼などの石の文化があります。これは、陶石を作っていた古い工房です。かなり古い工房ですが、これを九谷焼のいろいろなアーティストや若い作家、そして、九谷焼に関連する、例えば、食の業界や織物の業界の方々に使っていただいています。いろいろな産業の方々を集めた一種のイノベーション施設にしようということで、去年５月に「九谷セラミック・ラボラトリー　CERABO KUTANI」というのを作りました。中でワークショップをやったりして、非常にいい施設です。こういうところで、日本遺産をテーマにしていろいろなディスカッションをやっています。ちなみに、これは隈研吾さん設計の建物で、ぜひご覧いただきたい建物です。毎回私もここに入って、一緒にやっています。ここにはコマツという会社があり、鉱山がありました。いろいろな会社があり、バラバラにやっていたのです。それをもう一度再編成することによって新しい産業を生み出していこうとしています。このワークショップで。こんなことをずっと続けています。

それから、これは宇都宮市の大谷石ですね。ここも同じ石の文化で、「地下迷宮の秘密を探る旅」という日本遺産の物語です。ここで特に注目したのは、この巨大な空洞です。圧倒的な景観ですね。シルクロードの最後の終着点みたいな、そういう場所なんですね。それからこれは産業ですから、いろいろな産業があって、それをつないで、もう一度作り出すみたいなこともやっています。そして何といっても大谷石の教会や大谷石の集落。こういう大谷石でできた建物が、40～50くらいかたまってあります。スペイン人もびっくりするような景観があります。こういう景観は活かしましょうというので、いろいろ考えたんです。特に宇都宮辺りは物流拠点にもなっている。そこで、物流倉庫への地下冷熱の供給とか、特産のイチゴを何とか栽培できないかを考えました。

こういう戦略を具体的にするには、いろいろやらなくてはならないことがたくさんあります。行政が強いリーダーシップを持ち、産業の皆さんと一緒になって人をどう作り育てていくかです。人を作るというのは大げさな言い方かもしれませんが、こういう方々をどうやって発掘していくかということが大事ですね。

〈基本戦略のための仕組みつくり〉

海軍の地の呉市の例をまた紹介します。３年前から「くれ観光未来塾」というのをやっています。民間の事業者の起業塾ですが、行政の中の17課25人のメンバーに呼びかけました。観光の課だけではありません。例えば、福祉課の職員は外から来る人の応対をしなくていいかというと、とんでもありません。車椅子で来た人をどうやってケアしていくのかということです。だから都市計画などいろいろな課の人たちが集まり、翌年から民間の人も入ってきました。民間の人ができるものを職員がバックアップしていくという行動計画です。今年で３年目になります。

〈文化財保存活用地域計画等との連携〉

最後に、日本遺産ということで文化財を活かす計画についてお話しします。これは福島県小浜市の「御食つ国（みけつくに）」というものです。ここに５つのゾーンがあります。いわゆる地域計画です。その中の一つが「京に繋がる鯖街道」で日本遺産を取っています。しかし、他にもたくさんテーマがあります。本来の文化財保存活用ですね。関連文化財群をいくつも作って、順次計画的に文化財をストーリーにしているという作業です。要するに一つ日本遺産に通ったからそれでお終いということではないのです。

ここ館林でも、縦横無尽にいろんなテーマがあります。テーマごとに文化財の整理をして、日本遺産の制度は一旦終わりですが、物語化していくという作業はこれからも続けてほしいと思います。

おわりに

広い意味での観光というのは、地域のいろいろな受け皿を作っていくことが大事です。美術館やホテル・レストラン、ブランド商品などです。そして人の移動をサポートする。鉄道などの交通です。そして、集客・送客のサポートです。こういうのは、一過性で終わってしまうことが多いので、景観をちゃんと保存し、環境整備をしていくというのが大事です。

今日は商工会議所の会頭もいらっしゃっていますが、食のブランドを作ったり、町の賑わいを出したりするために、日本遺産をどんどん活かしていってほしい。そして、全体をマネージメントする。いわばワンストップのマネージメント組織で、全体を見据えて動かしていくことが必要です。特に行政だけではなく、民間も含めたそういうワンストップ、前向きなものが必要です。

このあと、またお話が出ると思いますが、それを具体的に推進する側の仕組みをどうするか、次のパネルディスカッションでお話しできればと思います。

以上で、私の話は終了します。ご静聴ありがとうございました。

講師：丁野（ちょうの）　朗（あきら）　先生

東洋大学大学院国際観光学部客員教授・㈱ANA総合研究所シニアアドバイザー・観光未来プランナー

1950年高知県生まれ。同志社大学卒業。マーケティング及び環境政策のシンクタンクを経て、1989年㈶余暇開発センター移籍。「ハッピーマンデー制度」の提唱、産業観光などの地域活性化事業に携わる。2002年㈶日本生産性本部、2008年（公社）日本観光振興協会常務理事総合研究所長を経て、2017年より現職。観光庁・経済産業省・スポーツ庁、文化庁（日本遺産審査委員会委員）などの関係省庁委員や呉市（顧問）・横須賀市・小田原市・高岡市（参与）などの各地の自治体観光アドバイザーなどを務める。

❖第２部　演舞

日本遺産「里沼」構成文化財「上三林のささら」　　上三林ささら保存会

館林市指定重要無形民俗文化財「上三林のささら」（平成５年７月16日指定）

「ささら」とは、本来、竹や木で作られた楽器の一種を指し、この楽器が獅子舞によく使われたことから、獅子舞自体を「ささら」と呼ぶようになったと考えられている。「上三林のささら」は、江戸時代中期頃に武州忍（現在の埼玉県行田市）の下中条より伝来したといわれ、豊作の年にのみ、五穀豊穣に感謝し疫病神を追い払う祭事として、上三林雷電神社の祭日（旧８月15日）に奉納されてきた。現在は、雷電神社の秋季大祭に奉納されている。内容は、「花棒っ子」と呼ばれる幼児や「ささらっ子」と呼ばれる子ども、「若衆」たちによる棒や刀の仕合二十一演目と、「雌獅子かくし」など十三の演目を演じる「一頭一人立三匹獅子舞」で構成される。奉納日には、花棒・棒方・獅子方・笛方などが雷光寺から行列を作って雷電神社や地区内の八坂神社、十九夜堂などでささらを奉納する「道行き」が行われる。

民俗芸能としてのささらの原形をよく保ち、地域的特色を顕著に表しており、貴重である。

進行・解説：上三林ささら保存会　須永治男氏

❖それではみなさん、大きい声で挨拶しましょう。お願いします。（一同礼）

❖これから、上三林町に伝わっております「上三林のささら」をご披露いたしますが、簡単に紹介をさせていただきます。「上三林のささら」は、「実りの沼」である多々良沼に関する構成文化財になります。多々良沼は上三林からだいぶ離れていますので、なぜと不思議に思う方もいらっしゃると思います。実は毎年６月から、田植えが始まります。その時期に、多々良沼から逆川・新堀川を経由しまして、水が今も土地を潤しています。多々良沼の水を使って、水稲栽培等を行っているというところです。

❖今日は、この地区の子どもたちが演じますが、祝日という事で、ほかのイベント等と重なってしまい、数名参加がかないませんでした。刀を使った棒振りという演技がありますが、その一部は師匠との演技になってしまいますが、ご了承いただければと思います。そして、本日舞台に上がりました子どもたちは、夜遅くまで練習を重ねて参りました。演技が終わりましたら盛大な拍手をよろしくお願いいたします。

＜花棒＞

❖最初に花棒という演技になります。花棒というのは、未就学児、幼稚園・保育園の子どもたちが演技をするという形になっております。花棒１：小倉一晟さん（年長）・橋本紗季さん（年少）花棒２：小倉一晟さん（年長）・橋本彩那さん（年長）

＜棒振り＞

❖花棒が終わると、棒振り、刀を使った棒技になります。この演技は26通りくらいありますが、その中で代表的なものをご覧いただきます。棒振りは、獅子舞の前に行われ、獅子の前に立ちはだかる悪霊を払うためなどの説があります。また、流派は柳生新陰流と伝えられています。演じるのは、地元の第七小学校の児童たちです。棒振りが終わると獅子舞になります。

（1）平霞崩し：須永詩海さん（小１）・師匠
（2）新棒：坂本碧さん（小２）・野口幹太さん（小２）
（3）相霞：安路賀希夢さん（小2）・橋本悠希さん（小２）
（4）青元：安路賀來人さん（小５）・師匠

＜獅子舞＞

❖棒振りが終わると、そこに獅子が入ってきます。獅子を踊る子どもたちはみな小学４年生で、３人の演技になります。一頭一人立三匹獅子舞という形で、演目は「入羽」と「渡り節」です。これは、３頭の獅子が花見に出かけ、真ん中の雌の獅子（中獅子）をめぐって雄の先獅子と後獅子が争いますが、最後は仲良く帰っていくという内容です。ここから笛も入り、小学生２人の演奏となります。

先獅子：須永洸央さん（小４）　中獅子：坂本煌さん（小４）
後獅子：石川智久さん（小４）
笛：野口琴音さん（小５）・小倉夢華さん（小２）
※演技終了後、整列・挨拶

❖第３部　パネルディスカッション

日本遺産「里沼」と館林の未来～ヌマベーションを合言葉に～

コーディネーター　橋本　淳司　氏（水ジャーナリスト）
パネラー　丁野　　朗　氏（観光未来プランナー）
同　正田　　隆　氏（館林商工会議所会頭）
同　恩田　昭一　氏（館林市認定農業者協議会会長）
同　須藤　和臣　氏（館林市「日本遺産」推進協議会会長／館林市長）
《司会進行　戸叶俊文（館林市教育委員会文化振興課長）》

戸叶　それではこれよりパネルディスカッションを開始いたします。パネラーは基調講演をいただきました丁野朗さん、館林商工会議所会頭の正田隆さん、館林認定農業者協議会会長の恩田昭一さん、須藤館林市長です。コーディネーターは水ジャーナリストでいらっしゃいます橋本淳司さんにお願いしております。それでは橋本さんよろしくお願いします。

橋本　コーディネーターを務めさせていただきます橋本と申します。よろしくお願いします。今回パネルのタイトルが日本遺産「里沼」と館林の未来～ヌマベーションを合言葉に～というテーマで進んでいきたいと思います。先ほど丁野先生の方から日本遺産について解説をしていただきました。しかし、まだまだわからない言葉が並んでいますね。「里沼」という言葉、これを初めて聞く方もいらっしゃるのではないでしょうか。実は私の周りには「館林には里沼という沼があるのか」というような方もいらっしゃるくらいで、これは「里沼」というものがどういう意味なのか考えていかなくてはいけないなと思います。それから「ヌマベーション」という言葉も初めてお聞きになる方がたいへん多いのではないかと思います。今日はこのパネルディスカッションのタイトルの中に、「館林の未来」という言葉が載っています。先ほどかわいい子どもたちがささら舞を踊ってくれましたが、ここではあの子どもたちのことも考えて、未来へと考えていきたいと思います。

ははじめに、「日本遺産里沼へ寄せて」ということで、パネラーのみなさんに自己紹介と里沼への想いをお聞きしたいと思います。では丁野先生からお願いします。

丁野　みなさん改めまして、丁野朗です。先ほどはありがとうございました。日本遺産のこと、あるいは里沼の特異性というものは先ほどのお話の中で申し上げたところです。私は実は東武沿線の住人でして、埼玉の越谷市に住んでおります。子どもたちが小さい頃はしょっちゅう館林にツツジを見に来ていました。

沼というのは自分の住んでいるまわりには意外と少なくて、越谷にはレイクタウンがありますが少し違うなという感じがします。というのは、人の暮らしが営まれているかです。もともと埼玉には川も山も海もなく、だったら作っちゃえと、それで出来たのがレイクタウンです。そういった池はありますけれど、「里沼」となるとやっぱり違っているなと思いました。これまでに日本遺産認定になったもので一番近いものは琵琶湖ですね。琵琶湖はそういう言葉は使っていませんが、「祈り」「実り」があり、「守り」ながら武将たちがいろいろなことをしてきました。しかしあまりにも規模がでかすぎまして、やっぱり「里沼」というイメージをもっているのはここ館林にしかないんじゃないかと思い、改めてこの地域の特性である３つの沼が貴重であると思いました。とりあえず感想です。

橋本　ありがとうございます。続きまして正田会頭お願いいたします。

正田　商工会議所の正田でございます。里沼、実はこの認定にあたっては、私の前の会頭であった河本前会頭が市長や市の担当の方と一緒になって認定にこぎ着けた経緯がございます。私はその後を受けて、日本遺産というものがまちに根差すようなものになれればいいなと思うような立場でございます。自己紹介いたしますと、中学までは館林市におりまして、高校からは外に出ました。小学校のときは自転車でまちのなかを駆けておりました。沼辺の夕陽を眺めながら、急いで家に帰らなくてはというような思い出があります。素晴らしい沼辺文化ですが、住んでいる人びと

にとっては当たり前の光景であろうと思います。これが文化庁に認められるような価値があるものかと、なかなかすぐに気がつかないのではないかと思います。会社でも自分たちがもっている技術や強みは組織の中にいると気づきにくいものです。それに気がついて評価にもっていくプロセスというのはなかなか大変でして、館林市の素晴らしい文化ですと文化庁に一生懸命PRした市の業績が実ったものでございます。せっかく認められたものですのでこれを活用していきたいなと思っております。よろしくお願いします。

橋本　ありがとうございます。会頭のおっしゃる通りで、飲める水に恵まれていることも沼の恩恵だというふうに感じます。当たり前と思っていたことは当たり前ではないということに気をつけて進んでいきたいと思います。続きまして恩田さんお願いします。

恩田　みなさんこんにちは。館林市認定農業者協議会会長の恩田昭一と申します。農業という分野は水がなければ成り立たない産業でございます。その点、本当にこの地域は南は利根川、北は渡良瀬川、そして今回の沼。こういった水環境に恵まれた中で農業をさせていただいております。それが今回日本遺産になりましたが、それこそ自分たちにとっては当たり前の中でやってきた仕事の中で恩恵を受けているものが認定されたということで、どんな協力ができるのか、農業という分野からどんなものが生み出せるのかと、これから市民のみなさん、農業者以外のみなさんとも考えていかなければならないことであろうと思います。そのへんのところを今日はこれから考えていきたいと思いますので、よろしくお願いします。自己紹介をさせていただきます。先ほど「上三林のささら」がありましたが、自分は三野谷という地域は同じなんですが、野辺町というところに住んでおります。ここはちょっと沼から離れていますが、麦の栽培がとても盛んです。こういった農産物がどのようなかかわりをもって今回のヌマベーションにつなげていけるか楽しみにしておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

橋本　ありがとうございます。里沼は人の暮らしと密着しているということで、そういった観点からご発言いただきたいなと思います。それでは須藤市長お願いします。

須藤　市長の須藤でございます。どうぞよろしくお願いいたします。館林の沼々は、先ほど正田さんや恩田さんがおっしゃった通り当たり前の風景として認識していたものでした。80歳以上の方々はよく沼で泳いだとかという話を聞きますので、その方々は沼への思い入れが強いでしょうけど、私たちが子どものころは泳ぐというところではございませんでしたので、普通の風景の一部でした。しかしそれがいつ自分の中で意識が変わったのかといいますと、ちょうど結婚する時、東京で家内と知り合って、こっちに移ってくることになりました。家が木戸町だったので駅から歩いていくことが多かったんですが、家内が「ここは日本昔話のようなところですね」と言うんですね。それはどういうことかというと、沼ばっかりあってぼーっとしたように見えると。家内は宮崎出身だったので向こうはカラッとしていたんですね。確かに春の３月４月５月は、朝目覚めるとき沼辺から鳥が来るんですね。さえずりをするわけで、それで目覚めます。私の自宅は松沼町ですから多々良沼なんですが、東京に行った大学生の娘が帰ってきて、ここはジャングルだというくらい鳥のさえずりがすごいんですね。なぜ鳥のさえずりがすごいかというと、やっぱり沼にエサがあるので鳥たちのオアシスが形成されていくわけです。実は最近オカリナ奏者の宗次郎さんと会う機会があって、宗次郎さんには館林市のふるさと大使をお願いしています。宗次郎さんも多々良沼を見ながら幼少期を過ごしていて、曲を作るあるいは曲を演奏する背景には沼の風景があるといっています。この里沼というのは茂林寺沼・城沼・多々良沼なんですけれども、人の感性を磨いていく力、感受性を育てる力、そこから共感能力を育んでいく力があるんじゃないかと思います。先ほど丁野先生が中学生や高校生のお話をされていましたが、まさにここは子どもたちを育むのにふさわしい郷土ではないかと思っています。

橋本　ありがとうございます。日本昔話ってすごくいいですね。私は職業柄、海外の水の乏しいところに行くことが多くて、どんどん沼が消えてしまっているところを目の当たりにしています。食べ物をたくさん作らなくてはいけないために水が必要で沼がなくなってしまうというようなところをよく見ます。そういうところを見て痛感するのですが、人は水があるところにしか住めないと。これは当たり前の話なのですが、改めて海外を見て、ここに帰ってくると本当に水があって物が豊かというだけではなくて、心が癒されるんですね。朝霧の中の多々良沼を歩いたり、城沼を夕方散歩したり、茂林寺沼の周辺は本当に植物の素晴らしいところで、植物の木漏れ日というか光の中を歩いてみるとすごく気持ちいいというか、すごく癒されます。

　では質問の２番目として、日本遺産「里沼」というものもだんだん骨格が見え始めてきたと思いますが、ここは須藤市長にこれをどう活かしていくのかというお話をお願いしたいと思います。

須藤　今日お集まりのみなさまの中には、それぞれいろいろな団体に所属していらっしゃる方も多いと思います。そこで最初から結論を申し上げたいと思います。今後進むべき方向性について、今日この機会に、私たちはヌマベーション連絡協議会というものを立ち上げることができたら、それを目指すことができたらよいかなと思っております。まずヌマベーションという言葉ですが、沼辺とイノベーションをかけ合わせて、沼辺に新たな顧客を創造する、そのようなイメージです。ちょっとイメージしにくいと思うので、パネルを先ほど用意させていただきました。１時間前に完成した作品です。白鳥をイメージして作ってみました。私たちは、今よく官民協働のまちづくりといっていますが、何のまちづくりをするんだろうという共通認識がなかなか持てていなかったんですね。そこで私たちは日本遺産「里沼」というものを得ることができました。その「里沼」こそ私たちがまちづくりとして目指すべき、あるいは不変のまちづくりとして維持すべき北極星なのではないかと思います。このパネルの絵は白鳥ですけれど、皆でそちらの方を向いて目指していこう、羽ばたいていこうというイメージであります。今回このイメージでヌマベーション連絡協議会というものを立ち上げることができたらよろしいかと思っております。そして、様々な団体のみなさんにここにご参画いただいて、協働共創のまちづくりをしていくと。そしてそこには２つのポイントがあります。こちらのウイングはシビックプライドウイングと名付けたいと思います。市民の郷土愛の醸成、日本遺産の目的の１つにはそのことがあります。そしてその郷土愛を醸成するとともに、私たちの里沼の先人たちが守ってきた自然と共生する暮らし、環境保全、こういうことを取り組んでくださっている団体は今までも館林に数多くあります。みなさんのおかげで里沼が維持できているといっても過言ではないと思います。このシビックプライドウイングに、そういった方々にご参画いただければありがたいと思います。そして、もう１つ、日本遺産の目的は、地域活性化であります。先ほど、様々な取り組みの事例を丁野先生からお伺いしましたが、私たちは日本遺産に認定されたことによって、地域活性化をしていくことが次は重要になります。こちらのウイングはブランディングウイング、館林のブランド力を向上させていくウイングです。今までは日本一暑いまちが館林のブランドのようなものとしてありましたが、最近日本一暑い日が２年連続無くなりましたので、その看板は下ろさせていただいて、新しいブランディング、この「里沼」というブランディングを高められればいいと思っています。そこには事業者のみなさまのそれぞれの商いなどが、地域活性化に結び付いていければいいかなと思っています。こうした２つのものをあわせてヌマベーション連絡協議会というものを立ち上げたいと思っています。現在、すでに協議会として、

館林市「日本遺産」推進協議会が発足しておりますが、市においても、そのプロジェクトチームとしてのタスクフォースチームがあります。その２つを、先ほどの２つのウイングを市としてもコーディネートさせていただきながらしっかりと取り組んで参りたいと思っております。このシビックプライドとブランディングの部分は、今日お集まりのみなさま方が主役であり担い手でございます。このようなことを今日、目指すことを提言させていただければと思います。

橋本　ありがとうございます。30年後、里沼というものが花開くような種まきだというようなことだと思いますが、それの担い手は今日お集まりのみなさんやそのほかの市民のみなさんというお話でした。非常に素晴らしい、この白鳥の絵を掲げていただきながら説明いただきましたが、これからパネラーのみなさんに未来に向けてヌマベーションの方法ということでお話いただければと思います。丁野先生、まず先生は私たちの事業を見守るお立場かと思いますが、どのような考え方でヌマベーションを進めて行ったらいいでしょうか。

丁野　日本遺産というのは外から来られるお客様に向けていろんな情報を発信するとかそういったところが大事になってきます。シビックプライドの分野で大切なのは外から来られる観光客との交流です。そうした人が来られるときに館林や里沼の話をきちんと市民のみなさんができるようになってほしいと思います。つまり観光事業化ですね。つまり両ウイングは繋がっている。私はいろいろなところに関わっていますが、四国の高知はシビックプライドのモデルのような地域で、ゆずで有名な北川村と馬路村という村があります。人口が非常に少ない、周辺の５つの町を足しても館林市の４分の１くらいの小さなまちです。そこはゆずで日本遺産となりました。これはかつて森林鉄道があって、地元の方々は林業にかわる作物を植えることになりました。土佐には坂本龍馬とか中岡慎太郎という有名な幕末の志士がいますが、中岡慎太郎はゆずを植えて藩の特産とすることを奨励しました。その森林鉄道からゆずのまちとなったのが地域の大きな糧となりました。日本遺産というのはみなさんの生活、つまり農家がゆずを植え、ゆずの聖地としてさらにそれを加工して大きな産業としました。この姿そのものがシビックプライドです。それを、館林のみなさんも活用してほしい。みなさんが沼を活用してヌマベーションがどんどん成功していくとそれがみなさんのシビッ

クプライドになり、同時にそれが地域の経済を活性化していくという構造ができる。これは素晴らしいですね。どうしてもみなさんは市がやってるので私たちの暮らしに関係ないと思ってしまうのですが、そうならないようにヌマベーション連絡協議会がいろいろな活動をする、どんどん提案していくようになれば、とてもいいなと思いますね。

橋本　ありがとうございます。それでは正田会頭と恩田さん、お二人にとってのヌマベーションの方向性ということでお話しいただきたいと思います。まずは正田会頭お願いします。

正田　そうですね、商工会議所ですので会員のみなさんに有益なものになるというところが一番会員の関心の高いところだと思います。それぞれの事業者の考えは違いますので、一概にそれは統一できる考えではないと思います。日本遺産となって環境保全の分野で館林はその恩恵を受けるだけではなく、何か貢献するという動きも強くなっているなというふうには思います。例えば、マーケティングなどは比較的得意な方々にとっては、その魅力に関連してPRに活かすということなどが手近なことになると思います。しかし、本質的にはそこでいろいろな交流があってその中で新しい感覚が生みだせるのではないかと思います。狭い範囲でやっていたことが少し広がりをもって商売に発展していければいいなと思います。それはイノベーションというか新しい取り組みに繋がるのかなと思います。

橋本　ありがとうございます。イノベーションを求めながらも環境保全も行えるんじゃないかというようなお話、ありがとうございました。それでは恩田さんお願いします。

恩田　自分はいま同じような立場で農商工連携のフードシェッドプロジェクトに取り組んでいます。この言葉自体、みなさんあまり聞いたことがないと思うのですが、農業商業工業の連携で新しいものを創り出そうではないかというプロジェクトが市で動いております。まだ会議は１回しか進んでいませんが、できたものをブランディングして、ヌマベーションのブランディングとともにやっていきましょうということだと思います。まだ実現化はしていませんが、一例を申し上げますと、先ほど自分は農業をやっていて麦を作っているといいました。実際この麦を使って館林ではうどんでも麺のまちで売り出しています。うどんの会の会長さんにどんな小麦がいいんですかと聞くと、実際今は作られていない小麦の品種を申されたんですね。そうすれば、もしその小麦を栽培して製品化することが可能であれば館林産の地うどんという形で館林発のうどんというものが出来ると。そうすれば先ほどから丁野先生がおっしゃられているように、農家としては自分たちが作った粉がどこで使われているかわからないということではなくて、自分の作った粉が地元で消費されて食べておいしいという評判を得ればそれこそ自分のプライドにつながることになるのではないかと思います。これがまず１点。あともう１つは、シークワーサーです。この地域はたいへん暑い土地ですので、最近暑い土地で何ができるかということでシークワーサーという話が出ています。この前の会議でシークワーサーの果汁で試作品を作っていただきました。今日もこの会場でマルシェをやっていらっしゃる菓子工業組合の会長さんがご協力くださって、それをどら焼きにしてくださいました。食べたらたいへん美味しゅうございました。このようにチームのみなさまが農商工という形でやっていくといいと思います。この発展形が市民のみなさんを含めて事業展開に繋がればいいなと思い、お話させていただきました。これは個人的な意見なんですけれども、今は大規模なショッピングモールとかがあり、どこへ行っても同じ看板・同じ建物があります。そういったものにはインバウンドの方は全然見向きもしないだろうと思います。館林はそういうものがあまりないからこそ、この里沼で日本遺産が取れたのだと思います。ですからこれを市長はじめ市のみなさんがやっているということではなくて、個人でも、全然今まで気がつかなかったこともこうした面からアプローチできたら面白いものができたとなれば、日本遺産「里沼」を活かすということだと思います。

橋本　ありがとうございます。イノベーションということ、昔のイノベーションのイメージにはないイノベーションがありますし、観光も、海外の観光地ではもうあまり多数の人は来てくれなくてもいいよと、コアなファンの人が繰り返し来てくれるような観光地にしようじゃないかというようなところも出てきていますね。私は市長が提示した白鳥の絵からインスピレーションが浮かぶことがあり、熊本の話を思い出しました。熊本で地下水協議会というものがあったのですが、熊本は地下水を100％水道水に使っているのでとても地下水が大事です。それが減ってきてしまったというのが1990年ごろにありました。ある有名企業の半導体工場が熊本にできるという話があって、市民はとても心配したんですね。その半導体工場が何をしたかというと、稲刈りが終わったあとの田んぼに自分たちでお水を入れはじめたんですね。田んぼに水を入れることによって地下水を増やす、そして自分たちで育てたお米を自分たちで食べるということをはじめました。環境保全とイノベーションは両輪ということでして、イラストの白鳥の片腕だけが一生懸命パタパタしていても飛んでいけません。これが両方上手い具合に羽ばたきがあるといいのかなと思いました。市長、お三方の意見を伺って、いまどんなことを感じられていますか。

須藤　先ほど講演のなかで丁野先生の方から、日本遺産のフォローアップの委員会があって、先生は委員長をつとめられていて、一生懸命やっていないところは外す可能性もあるといったお話がありました。その評価として市長がどれだけ積極的に取り組んでいるのかというのも点数になるということでした。それぞれお三方からお話がありましたが、市もコーディネートの部分で、しっかりと進めていくためにタスクフォースチームというものを作りました。対象となる事業では係長クラスがメンバーになり、これまで２回ほど会議をやりました。白鳥は雁飛行をします。先頭はあまり鳴かないのですが、両ウイングの２番目３番目が「グワグワグワグワ」と鳴いています。これが「がんばれがんばれ」といってるように聞こえます。市役所のなかで、このタスクフォースがまさにその白鳥の様に羽ばたいてきているなとちょっと実感しています。いくつか事例を出しますと、まず１つ、環境保全においては、実はそれぞれの沼で水質によって濁りが違うんですね。魚の種類も違ってくるわけです。ちなみに一番きれいな、BODが１なのが、近藤沼と茂林寺沼です。中間が多々良沼でBODが５です。城沼と蛇沼がBODが10です。でもそれが一概に悪いかというとそうではありません。そこではナマズなどが底を這ってエサを食べています。多様な沼の中に多様な魚が棲むことができるというのも魅力と言えば魅力です。ただ、かつてきれいな沼の中で泳いだという時代がありますから、そこは市民のみなさんと協働のまちづくりの中で改善していくポイント、取り組むポイントではないかと思っております。一方、ブランディングのウイングですが、いま広報を一生懸命やっており、観光協会のみなさまがピンバッジを作ったり、あるいは名刺をそれぞれ祈りの沼・実りの沼・守りの沼のものを作っております。また、観光パンフレットも新しい、職員が手作りで素敵なものを作っています。ここには川魚屋さん、ラーメン屋さん、うどん屋さん、あるいは和菓子屋さんなどショップも掲載したものになっています。また、郵便局に話してみましたら里沼の切手を早速作ってくれました。商工会議所のみなさまにも日本遺産のシンボルマークや「里沼」という言葉をぜひ商品のラベルに入れていただくようにお願いしています。一方で土地の利活用ということもテーマとして浮上してきています。茂林寺沼の南岸の遊歩道を去年整備して、１周20分の遊歩道ができました。これで多々良沼・城沼とあわせて３つの沼の遊歩道が完成しました。これからは利活用としてポイントとなるのは、周辺で休むところが必要じゃないかということです。ベンチもさることながら、カフェがあったらそこで休んでいただける。おしゃれなカフェの誘致も市として取り組みをスタートしています。ただ景観を邪魔しないような形のスポットでなければならないと思います。もう１つは、水の中に入るということです。今は泳ぐことはなかなかしないと思いますが、舟で沼の中に入ると親水性も増し、いろいろな環境問題の意識にも繋がって参りますし、楽しみにもなってきます。今日は多々良沼の日向漁協さんもたくさんいらっしゃっていると思いますし、城沼にも漁協さんがあります。それぞれの漁協さんとタイアップすることで親水性を増すといったところも必要かと思います。また近藤沼では来年度バーベキュー場を作ろうと思っております。普通のものではなく、ちょっとおしゃれな居心地のいいバーベキュー場ができたらと思っております。さらに里沼マルシェといったものもこれからいいのではないかと思っております。例えば駅に橋上通路がありますが、そこも利活用しながら、里沼で生産されたものをマルシェにご提供いただきたいなと思います。最後に、私たちのまちで観光というと、見るところも食べるところもそこそこできてきてはいますが、弱点なのは体験型の観光がないということです。体験という部分では、現在、うどん打ち体験とか座禅体験、着物でまち歩きなどを取り組みつつあります。最近でははとバス的なものも来るようになっていますが、沼辺セグウェイもできたらいいのではないかと思います。ただいずれも市の職員がやれることとやれないことがあります。大事なこと・課題として感じているのは、グッドパートナーを、民間のみなさんの中からみつけることで、タイアップできる方あるいはお願いできる方、そういったことをこれから育んでいくこと、あるいは取り組んでいただくことが課題であり大事なことかなと思います。公民連携のまちづくりも進めなければと思います。

橋本　ありがとうございます。ヌマベーションというのは今日はじめてお聞きになった方もいらっしゃったかと思いますが、これから進めていこうというお話でした。まだまだヌマベーション、よくわからないよという方がいらっしゃると思いますので、まずは協議会をスタートさせて、そこでいろんな方にご意見をいただきながら進んでいくのだと思います。「祈り」「実り」「守り」という３つのワードはとても素晴らしい、人の営みをすべて表している言葉だろうなと思います。イノベーションというと先のことを想起するんですけれど、実は過去にも何度も何度もイノベーションというものがこの地で繰り返されてきたのだと思います。鉄を作ってきた人たちはどんなことを祈り、どんなことを守り、どんなことを実りとして感じていたのか。米を作っていた人たちはどうなのか、漁業をやっていた人たちはどうなのか、それから、観光をやっていた人たちはどうなのか。そして近年は、沼が汚れた時に環境保全活動をやっていた人たちはどうなのか。どんなことを祈って、守ろうとして、実らせてきたのか。こんなところをお聞きしながら、先ほどささら舞を踊ってくれた子どもたちが、あの子たちにとっても祈りや実りや守りというものが、50年後、100年後も続くように、そんな協議会ができてくればいいなと感じます。まだまだこの協議会に賛同してくださいというような段階

ではないのかもしれませんが、ぜひ協議会で話を聞いてみたいな、発言してみたいなと思われる方いましたら、拍手をお願いしたいと思いますがいかがでしょうか。（拍手）ありがとうございます。第一歩ですから、ここからしっかりと先ほどの子どもたちのためを考えながら、残していきたいなと思います。つたない司会で恐縮でしたが、これにてシンポジウムパネルディスカッションの方は終了させていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

戸叶　橋本さん、本当にありがとうございました。また、パネラーのみなさん、長い時間ありがとうございました。これにて本日のシンポジウムを終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

コーディネーター：
橋本（はしもと）　淳司（じゅんじ） さん

水ジャーナリスト。アクアスフィア・水教育研究所代表。

1967年館林市生まれ。学習院大学卒業。自治体・学校・企業・NPO・NGOと連携しながら、水リテラシーの普及活動（国や自治体への政策提言やサポート、子どもや市民を対象とする講演活動、啓発活動のプロデュース）を行う。近著に『67億人の水』（日本経済新聞出版社）、『日本の地下水が危ない』（幻冬舎新書）、『100年後の水を守る　水ジャーナリストの20年』（文研出版）、『水がなくなる日』（産業編集センター）など。Yahoo!ニュース個人オーサーアワード2019を受賞。実家は多々良沼の近くで、中学時代は沼周辺がマラソン練習コース。

パネラー：**丁野（ちょうの）　朗（あきら）** さん

＊第１部基調講演講師
11ページ参照

パネラー：
正田（しょうだ）　隆（たかし） さん

館林商工会議所会頭。正田醤油株式会社代表取締役社長。

1959年館林市生まれ。東京農業大学農学部醸造学科卒業。1873年創業の老舗企業である正田醤油株式会社の取締役、副社長を経て、2007年に代表取締役社長に就任。2019年11月に館林商工会議所会頭に就任。群馬県商工会議所連合会会長表彰、群馬県総合表彰等を受賞。館林市「日本遺産」推進協議会員。趣味は、仕事柄、国内外での食べ歩き及びその知見を活かした自宅での料理、JAZZ鑑賞、動物園・美術館巡り、スポーツはゴルフ。小中学校が城沼に近かったことから、沼周辺は子供のころからのプレイフィールド。

パネラー：
恩田（おんだ）　昭一（しょういち） さん

館林市認定農業者協議会会長

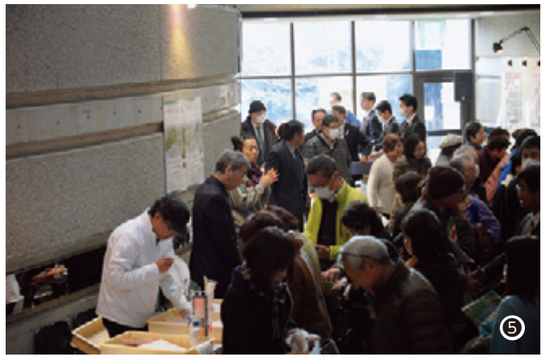
1966年館林市生まれ、館林市育ち。群馬県立大泉高等学校卒業。米・麦、きゅうり等の施設野菜を中心とした複合経営を営んでいる。経営改善に積極的に取組み、新技術の導入、肥培管理の省力化及び大型機械の導入による効率的な農業を行っている。また、農業経営士として知事認定を受けており、地域農業振興の推進や、次世代の農業後継者等の育成・指導する役割を担っている。館林の伝統的な郷土食で、沼辺文化の恵みである川魚料理が好み。

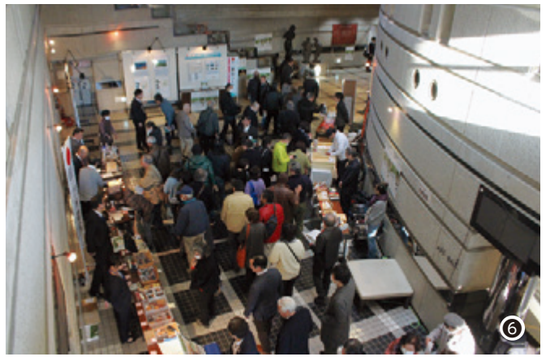
パネラー：**須藤（すとう）　和臣（かずおみ）** さん
館林市長

1967年館林市生まれ。学習院大学卒業。地元国会議員の公設秘書、農林水産大臣秘書官を経て、2007年群馬県議会議員に初当選し、以後３期務める。この間、県内の「上野三碑」の世界記憶遺産登録推進に尽力する。2017年４月、館林市長に就任。館林市「日本遺産」推進協議会会長。自宅は多々良沼の近くにあり、沼辺の「彫刻の小径」や「夕陽の小径」が散歩コースとなっている。

❖当日の様子（記録写真）

左上から　❶会場　❷受付風景　❸須藤市長あいさつ　❹「里沼」へのアプローチ
右上から　❺❻「里沼」マルシェ　❼「里沼」展示　❽「かかあ天下」展示





日本遺産認定記念「里沼」シンポジウム　アンケート結果

❖令和元年度日本遺産認定記念「里沼（SATO-NUMA）」シンポジウムでは、事業内容の効果測定及び将来における日本遺産「里沼」各種事業展開を見据え、アンケート調査を実施した。

❖アンケートは当日資料とともに配付し、シンポジウム終了後に受付にて回収した。

❖当日の参加者300名に対し、回収数は133枚であった。（回答率44.3%）

❖アンケートの質問項目については、右記の質問票（A4サイズ）のとおりである。

❖アンケート結果については、館林市「日本遺産」推進協議会事務局歴史文化部会（館林市教育委員会文化振興課日本遺産プロジェクト）の岡屋紀子・吉村昭和・岩瀬宇で集計・分析を行い、その結果は下記のとおりであった。

日本遺産「里沼」シンポジウム　アンケート

下記の質問に当てはまるものに〇をつけてください。

①このシンポジウムの開催を何で知りましたか？(複数回答可)
❶広報誌　❷市ホームページ　❸ツイッター　❹チラシ
❺ポスター　❻知人・家族　❼市の教室・研修会・会議
❽その他(新聞等)

②シンポジウムの内容はいかがでしたか？
(1)丁野先生の基調講演
❶よかった　❷どちらともいえない　❸よくなかった

(2)上三林のささら演舞
❶よかった　❷どちらともいえない　❸よくなかった

(3)パネルディスカッション
❶よかった　❷どちらともいえない　❸よくなかった

(4)日本遺産「里沼」マルシェ(物産販売コーナー)
❶よかった　❷どちらともいえない　❸よくなかった

(5)展示コーナー
❶よかった　❷どちらともいえない　❸よくなかった

③あなたは現在、日本遺産「里沼」に関わる活動をしていますか？
❶はい　❷いいえ　❸これからしてみたい

※❶❸回答したかた　具体的にどんな活動⇒[　　]

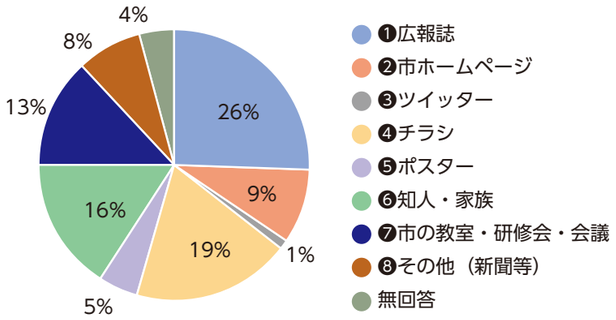
④本日のシンポジウムや、日本遺産「里沼」、ヌマベーションについてのご意見・感想があればお書きください。(自由記載)

あなたは
男・女　[　　]歳　[　　]市・町・村より参加

■アンケート結果：回収133枚／参加300名

①このシンポジウムの開催を何で知りましたか？（複数回答可）

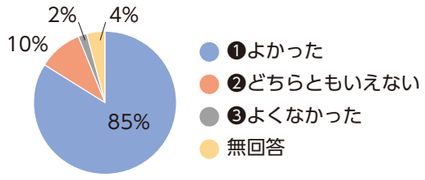
回答（185）	数
❶広報誌	48
❷市ホームページ	16
❸ツイッター	2
❹チラシ	35
❺ポスター	9
❻知人・家族	30
❼市の教室・研修会・会議	24
❽その他（新聞等）	14
無回答	7



②シンポジウムの内容はいかがでしたか？

（1）丁野先生の基調講演

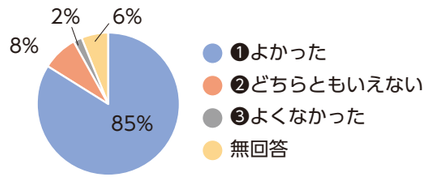
回答（133）	数
❶よかった	113
❷どちらともいえない	13
❸よくなかった	2
無回答	5



他地域事例紹介等があり分かりやすく、ストーリー伝達の重要性や今後の活動の参考になった等の高評価が多数あった

（2）上三林のささら演舞

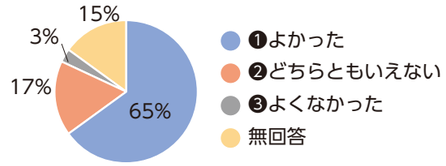
回答（133）	数
❶よかった	113
❷どちらともいえない	10
❸よくなかった	2
無回答	8



参加者は地元で受継がれてきた民俗芸能を目にする良い機会となる一方、保存会側は衆目を集めた晴れ舞台にすることができた

（3）パネルディスカッション

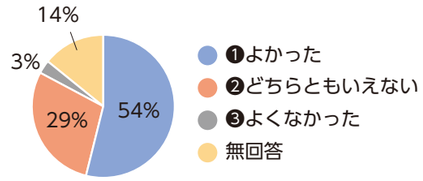
回答（133）	数
❶よかった	87
❷どちらともいえない	22
❸よくなかった	4
無回答	20



時間の都合により多くの設問は投げられなかったが、市民参加の場で、今後のヌマベーションに向けてのキックオフの場とすることができた

（4）日本遺産「里沼」マルシェ

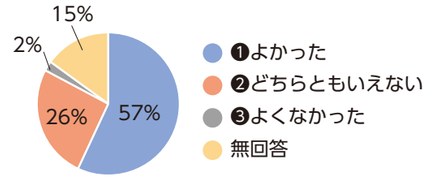
回答（133）	数
❶よかった	72
❷どちらともいえない	39
❸よくなかった	4
無回答	18



8店舗協力のもと里沼関連商品のPR・販売を行い売上げも好調だった。出店者から今後も定期的な販売機会を求める声も多く寄せられた

（5）展示コーナー

回答（133）	数
❶よかった	76
❷どちらともいえない	34
❸よくなかった	3
無回答	20

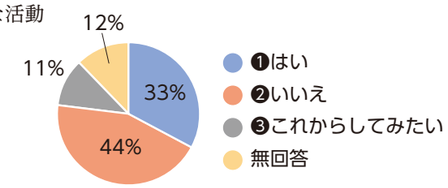


移動展示用パネルの簡易展示会で、群馬県世界遺産課「かかあ天下」の展示も連携して実施し、日本遺産のPRにつなげることができた

③あなたは現在、日本遺産「里沼」に関わる活動をしていますか？

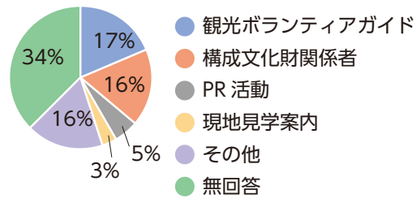
※❶❸と回答したかた　具体的にどんな活動

回答（133）	数
❶はい	44
❷いいえ	59
❸これからしてみたい	14
無回答	16



「❷いいえ」と回答した人が多かったが、本シンポジウムを通して、今後の参画意識を啓発することができたと考えられる

回答（58）	数
観光ボランティアガイド	10
構成文化財関係者	9
堀工町のどんど焼き3、大谷休泊2、旧館林藩士住宅2、つつじサポーターズ2	
PR活動	3
現地見学案内	2
その他	9
緑道整備、マルシェ、白鳥、麺、清掃、自然保護、情報発信、カフェ劇、郷土研究　各1	
無回答	25



既存団体等に属さず活動している人も意外と多いため、ヌマベーションへの組込みが課題である

④本日のシンポジウムや、日本遺産「里沼」、ヌマベーションについてのご意見・感想があればお書きください。（自由記載）

■里沼について一層愛着と学びを深める機会となりました。「里沼」マルシェにもっと沢山の魅力をもつ品々が並んでいくと館林の強みを生かしていかれると思います。（女・40歳・館林市）

■観光と総合したオリジナルの醤油とかカルピスを手作り出来ますか？（男・66歳・館林市）

■物語の見える化、普及活動が大事であると感じた。館林にもミュージアムを。（男・72歳・館林市）

■地元の自然環境を見直す良い機会となりました。（男・79歳・館林市）

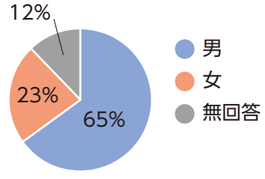
■多々良沼が見直されたのでとてもよかったです。自然をこれからも大切にしたい。（男・79歳・館林市）
■日本遺産を市民がしっかり理解・共有・行動し、地域活性化すなわち事業・経済発展まで踏み込む。（男・—・館林市）
■是非この流れを一過性のものではなく、自然を必要以上に壊すことなく、市民の生活や産業と融和する取り組みを継続していただきたい。（男・46歳・館林市）
■例えば多々良沼を活動エリアとする団体のネットワーク作りを行い、お互いが連携した活動の推進につなげることを考えたらと思う。（男・69歳・館林市）
■丁野先生の講演では、館林市「日本遺産」の今後のあり方についての示唆に富んだ内容で、大変参考になったと思います。（男・70歳・館林市）
■「里沼」とのつながりがわからない物産品が目立った。わかる物産が少ない。今後の展開が必要。（男・56歳・館林市）
■自然を生かされた里沼。大事に守っていきたいです。（女・78歳・館林市）
■勉強になりました。（女・—・館林市）
■沼→水が柱になることなので、板倉地区＋邑楽町地区をもっと重要視すべき。行政の線引きをのりこえて!!(男・—・館林市）
■多くの皆さんの活動が、今、日本の根っこの文化を掘り起こしていること。楽しみです。館林の強さを感じました。久し振りに頭の奥深いところが動いた！自分の町をどうしていくか、人々が考え始めた館林は、確かに大きな花を開くでしょう。町が動いている。市職員が間断なく働いている。（男・71歳・東京都）
■観光者人数が一番来られる城沼がもっともっときれいになる事を期待しています。（男・76歳・館林市）
■民間活力の活用・連携。（男・52歳・館林市）
■「里沼」を守ってきたこと。多くの人が何気なしに生活の一部としてきたこと。地域の優れた特色であること。これが認められ、地域の宝になっていく。すばらしいことだと思います。（男・60歳・足利市）
■子どもの頃から住んでいて当たり前の風景でしたので、これからが楽しみです。いろいろ骨を折ってくれる人達に感謝です。よろしくお願い致します。（女・73歳・館林市）
■講演はわかりやすくとても勉強になりました。これから「里沼」という財産をどう活かし、館林の未来につなげていくか、様々な角度からのすすめ方を教えていただきました。ささら演舞もかわいらしかったです。伝統が受け継がれていることに、地域の皆様の努力が感じられました。パネルディスカッションも館林の方向性が見えてきました。コーディネーターの橋本淳司さんが発展的な意見を引き出して下さって、とても良かったです。（女・50歳・館林市）
■時々こんなシンポジウムがあればもっと私も皆さんも「里沼」についてもっと理解できると思う。（女・70歳・館林市）
■みんなで協力して、すばらしい「里沼」のふるさとをつくって行こうと思いました。すばらしいひと時をありがとうございました。（女・65歳・板倉町）
■沼に関わる会の掘り起しなど、いかがですか？（女・70歳・館林市）
■大変良いシンポジウムでした。積極的に活動に参加して参りたいと思います。（女・53歳・館林市）
■現在どのくらい市民が「里沼」を知っているのか？また、関心を持っているのか？しっかりと知ってこれからの第一の問題、高校・中学・小学の生徒への問題提起が未来につながっていくと思います。（—・—・—）
■今後の活動の参考になりました。（男・71歳・館林市）
■館林市をPRするための里沼物語ロケ地として検討して頂きたい。多々良沼・城沼・茂林寺沼の水質に興味ありです。（男・49歳・館林市）
■城沼にポリ系のゴミが目立ちます。散歩の時に気付きました。渡良瀬川は年に一度春にクリーン作戦で住民が掃除をしています。（男・55歳・館林市）
■協議会への参画をしっかりやりたいです。（男・57歳・館林市）
■現在の花山・茂林寺・多々良沼等、これはというインパクトを表していないのではないか？これらをまとめる核になるものが欲しい。城とか。（男・86歳・館林市）
■里沼→ヌマベーションを「たてばやし未来農業科学都市」の創造・建設すなわち「水と緑のフードバレー・スマートシティ構想」の設計・実装につなげていきたい。2040年、館林広域圏の人口25万人の文字通りの「先端」の「未来R&D CITY　TATEBAYASHI」の実現。（男・61歳・館林市）
■丁野先生の言うように、これからどうしていくのか、市民の参加・協力をどのようにしていくのか？協議会の重要性を「里沼」認定のガイド養成をして欲しい。小・中・高校までの「里沼」学習・発表会。「里沼」ストーリーにあった商品開発を。（男・68歳・館林市）
■自然と環境と文化は合理性があると思うが、発展についてはわからない。（男・67歳・足利市）
■里沼とは考えると良くわからない。他県の方につつじの説明は出来ますが、里沼はまだまだわかりませんが、話を聴いているとなんだか楽しくなりそうです。（女・78歳・館林市）
■沼をどのように活用していくか。上三林ささらなど市内の伝統的な芸能などを観光客に披露する。（男・79歳・館林市）
■県外・市外からの交通手段を考えてはどうか？館林駅・多々良駅からの手段（里沼巡回バス）、期間限定つつじが岡公園も同じように必要と思います。（東武鉄道さんと共同で）　（男・67歳・館林市）
■日本遺産の認定を受けた鞆の浦と仙酔島もいい所ですよ。（男・55歳・館林市）

■大変勉強になりました。今後ともよろしくお願いいたします。（男・54歳・嬬恋村）
■パネルディスカッションの中で須藤市長が市民参加を訴えるのが上手でした。（男・28歳・前橋市）
■是非積極的に協力・連携していきたいと思える講演・ディスカッションでした。（女・—・館林市）
■館林の将来が楽しみになるシンポジウムでした。非常に参考になりました。（男・67歳・桐生市）
■現在はPRの時期と思った。市役所・駅・公民館などにPRコーナーをつくって情報を発信することが必要。まず駅の通路に大きなパネルを作ってください。インスタグラム等で写真などを発信してはどうか？（男・70歳・館林市）
■頑張ってください。（男・57歳・前橋市）

○その他（参加者属性についての質問項目）

あなたは

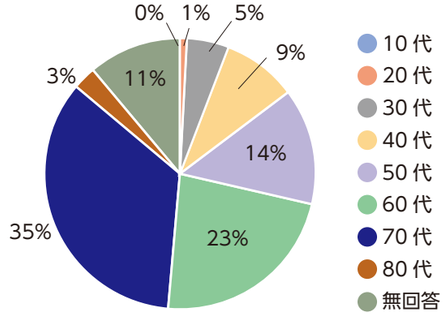
回答(133)	数
男	86
女	31
無回答	16



若者や女性、子育て世代などの参加者が少ないため、ヌマベーション各事業展開ではこの層をいかに多く取り込んでいけるかが大きな課題である

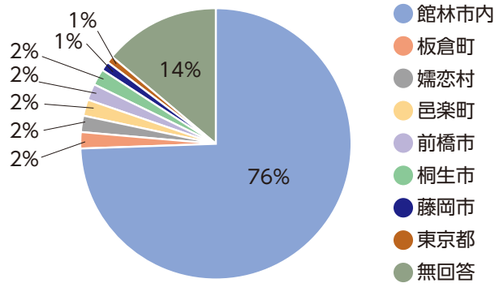
年齢

回答(133)	数
10代	0
20代	1
30代	6
40代	12
50代	19
60代	30
70代	46
80代	4
無回答	15



お住まい

回答(133)	数
館林市内	101
板倉町	3
嬬恋村	3
邑楽町	2
前橋市	2
桐生市	2
藤岡市	1
東京都	1
無回答	18



市内からの参加者が3/4以上だったが、日本遺産「里沼」の注目度から市外からの参加も多かった。次年度以降はさらに広域からの参加者増加にも取組む

日本遺産認定記念

文化芸術振興費補助金(地域文化財総合活用推進事業)

「里沼」シンポジウム

SATO-NUMA

JAPAN HERITAGE 日本遺産

❖令和元年度文化庁「日本遺産」に認定された館林市のストーリー「里沼(SATO-NUMA) ―『祈り』『実り』『守り』の沼が磨き上げた館林の沼辺文化―」について、より深く知るためのシンポジウムを開催します。

❖日本遺産を活用した館林市の新しいまちづくり＝ヌマベーションを皆さんと一緒に考えます。

丁野朗氏

■日　時：令和２年（2020 年）２月 11 日(火・祝)

午後１時 30 分～４時（開場　午後１時）

■会　場：館林市三の丸芸術ホール（群馬県館林市城町 1-2）

■プログラム

13：30　開会・「里沼」へのアプローチ

13：45　第１部　基調講演

「日本遺産」を活かす視点と手法

～館林の「里沼物語」をどう活かすか～

丁野　朗氏(観光未来プランナー・日本遺産審査委員)

14：45　第２部　演舞

日本遺産「里沼」構成文化財「上三林のささら」

上三林ささら保存会(館林市指定重要無形民俗文化財)

15：20　第３部　パネルディスカッション

日本遺産「里沼」と館林の未来　～ヌマベーションを合言葉に～

コーディネーター：橋本淳司氏(水ジャーナリスト)

パネラー：　丁野朗氏(観光未来プランナー)　　正田隆氏(館林商工会議所会頭)

恩田昭一氏(館林市認定農業者協議会会長)　　須藤和臣氏(館林市長)

＊日本遺産「里沼」マルシェ　　会場内にて里沼関連商品の特設販売ブースを開設

主　催：館林市「日本遺産」推進協議会

館林の文化は、すべて沼につながる

日本遺産とは？

平成 27 年度に文化庁が創設した事業で、地域の歴史的魅力や特色を通じて、我が国の文化や伝統を語るストーリーを、「日本遺産」として認定するものです。令和元年度までに館林市の「里沼」を含む 83 件が認定されています。従来の文化財行政一辺倒の歴史的価値を点として指定することで保存してきたのに対して、日本遺産では、点在する各遺産をストーリーとして繋ぎ、面的活用・魅力発信することで地域活性化を図るものです。

「里沼」とは？

沼は、古代・万葉の頃には「隠沼」と詠われ、水辺の草木に隠されてひっそりとたたずんでいる様子。人を寄せつけない、神聖な場でもありました。いつしか、人々が沼に近づき始うなで、暮らしと結びつき、沼と共生した生産や文化が生まれ、沼は「里沼」となりました。里沼は、自然と暮らしが調和した生活文化を今に伝える。我が国の貴重な財産です。新田開発や近代化の波にもまれ、各地から沼が消えたなかっみるな今、館林では、時を重ねながら、それぞれの特性を磨いてきた、希少な里沼を見ることができるこさから、令和元年度文化庁「日本遺産」に館林市のストーリー「里沼(SATO-NUMA) ―『祈り』『実り』『守り』の沼が磨き上げた館林の沼辺文化―」が認定を受けました。

里沼は、“多様性を生み出す母胎”

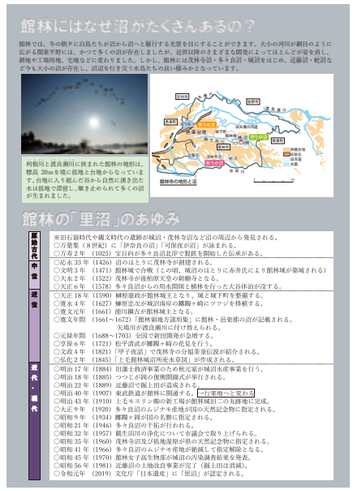
里沼(SATO-NUMA) ―「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化―

現在の沼が一望できる館林では、今も多くの可主沼をこ ことができます。館林の沼は大別とにわり、「里山」と同様に人々の暮らしと深く結び付き、人が沼辺を訪ホ ずことで沼好な環境が保たれ、文化が育まれてきた「里沼(SATO-NUMA)」であります。館林の里沼は、沼ごとに特性が異なります。その歴史を紐解くと、里沼の祖風習と信仰の名ぎする花神寺沼は「祈りの沼」、沼の恵みが暮らしを支えた多 良沼は「実りの沼」、館林城とつながる静地を守ってきた城沼は「守りの沼」と言い換えることができます。館林の里沼を通れば、それぞれの沼によって磨き上げられた館林の沼辺文化を味わい、体感することができます。

ヌマベーション(沼辺＋イノベーション) 新時代へ

NUMA-VATION　MUST　GO　ON！

館林市は日本遺産「里沼」の認定を契機として、沼辺文化を継承しています。それは、守り続けた「里沼」の自然環境と景観の継承であり、「里沼」に存在する歴史性の継承であり、「里沼」に親しむこの継承です。「里沼」を活かした新時代の館林市に向けて、「沼辺」＋「イノベーション」＝「ヌマベーション」を合言葉に、(1)沼に関わる人や組織のネットワーク構築、(2)農漁業と新しい観光・産業の融合、(3)シビックプライド醸成によるまちづくりを進めてまいります。主役は市民のみなさんです！



館林にはなぜ沼がたくさんあるの？

館林では、冬の朝夕に白鳥たちが沼から沼へと飛行する光景を目にすることができます。大小の河川が網目のように広がる関東平野には、かつて多くの沼が存在しましたが、近世以降のさまざまな開発によってほとんどが姿を消し、耕地や工業用地、宅地などに変わりました。しかし、館林には茂林寺沼・多々良沼・城沼をはじめ、近藤沼・蛇沼など多くの沼が存在し、沼辺を行き交う水鳥たちの良い憩みかとなっています。

利根川と渡良瀬川に挟まれた館林の地形は、標高 20m を境に高地と台地からなっています。台地に入り組んだ谷から自然に湧き出た水は低地で溜まり、囲まれて多くの沼が生まれました。

館林の「里沼」のあゆみ

縄文時代	※旧石器時代や縄文時代の遺跡が城沼・茂林寺沼など沼の周辺から発見される。
奈良・平安	○万葉集（８世紀）に「伊奈良の沼」「可保夜の沼」が詠まれる。 ○万寿２年（1025）定日村が多々良沼近傍で製鉄を開始したと伝承がある。
鎌倉	○応永 33 年（1426）沼の ほとりに茂林寺が創建される。 ○文明３年（1471）館林城で合戦（この頃、城沼のほとりに赤井氏により館林城が築城される） ○大永２年（1522）茂林寺が後柏原天皇の勅願寺となる。 ○天正６年（1578）多々良沼からの用水開削と耕林を行った大谷休沼が没する。
江戸	○天正 18 年（1590）榊原康政が館林城主となり、城と城下町を整備する。 ○寛永４年（1627）榊原忠次が城沼南岸の鷺囀ヶ崎にツツジを移植する。 ○寛文元年（1661）徳川綱吉が館林城主となる。 ○寛文年間（1661～1672）「館林新地方議和集」に館林・邑楽郡の沼が記載される。 元禄川が渡良瀬川に付け替えられる。 ○元禄年間（1688～1703）全国で新田開発が急増する。 ○享保６年（1721）松平清武が鷺囀ヶ崎の花見を行う。 ○文政４年（1821）「甲子夜話」で茂林寺の分福茶釜伝説が紹介される。 ○弘化２年（1845）「上毛館林城沼四郎水草図」が作成される。
現代・現在	○明治 17 年（1884）田邊士教沼事業のため秋元家が城沼水産事業を行う。 ○明治 18 年（1885）つつじが岡の後閑園藤式が移付される。 ○明治 22 年（1889）近藤沼で堀上田が造成される。 ○明治 40 年（1907）旧武蔵が館林に開通する。一行車地へと変わる ○明治 43 年（1910）上毛キスリン鶴の新工場が館林城址二ツ丸跡地に完成。 ○大正９年（1920）多々良沼のムジナモ産地が国の天然記念物に指定される。 ○昭和９年（1934）鷺囀ヶ岡が国の名勝に指定される。 ○昭和 21 年（1946）多々良沼の干拓が行われる。 ○昭和 32 年（1957）戦生田川の浄化についての協議が取り上げられる。 ○昭和 35 年（1960）茂林寺沼及び低地見好が県の天然記念物に指定される。 ○昭和 41 年（1966）多々良沼のムジナモ産地が絶滅して指定解除となる。 ○昭和 45 年（1970）館林女子高生物部が城沼の汚染調査結果を発表。 ○昭和 56 年（1981）近藤沼の土地改良事業が完了（堀上田は消滅）。 ○令和元年（2019）文化庁「日本遺産」に「里沼」が認定される。

令和元年度　日本遺産認定記念

「里沼（SATO-NUMA)」シンポジウム報告書

令和2年(2020)3月27日

JAPAN HERITAGE 日本遺産

編集：館林市「日本遺産」推進協議会事務局歴史文化部会
（館林市教育委員会文化振興課日本遺産プロジェクト）
発行：館林市「日本遺産」推進協議会

〒 374-8501　群馬県館林市城町1番1号
☎ 0276-72-4111（代表）　館林市政策企画部企画課
✉ nihonisan@city.tatebayashi.gunma.jp

※本報告書記載内容の無断転載等は禁じます

文化庁　文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）

館林の里沼

文化庁

文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）